



親鸞の生涯 24

その妻 恵信尼

親鸞と恵信尼とはいつ結婚したか。他に別の妻はいなかつたか。恵信尼の出自は。など現在にいたるまでそれに応える資料は発見されていません。しかし恵信尼の行績や残されている手紙などから推測して次のことが言えると思います。

①結婚は法然門下にいたとき。越後流罪のとき(親鸞三十五歳)には妻恵信尼と三人の子女を伴って行つた。(当時の法律では流罪の際には必ず妻子同伴とあつた) ②手紙によると恵信尼はこまめに日記を書く女性であった。当時としては異例な「花押」(今でいう実印署名)をもつほどの教養の高い人物であった。残されている手紙の文体からもそれは十分伺える。③三善氏の娘であった。父は当時京都で中央官吏。以前は越後の国司を勤めていて越後にはかなりな土地財産もあつた。流罪に越後が選ばれたのはその情実があつたからかも。

【恵信尼が末娘覚信尼にあてた手紙】

さて、常陸の国の下妻と言うところの「境の郷」(茨城県真壁郡下妻市坂井)に滞在していましたとき。(越後から関東への旅の途中)こんな夢を見ました。それは、なんだか「堂供養」(お堂のおまつり)のようでありまして、お堂は東向きに建っているのですが、どうやら宵宮なのでしょう、お堂の前には「立て灯」が明々と輝いておりました。その明々と燃える「立て灯」の西、つまりちょうどお堂の前に、鳥居のようなものがあり、その横木に、なんと仏さまの絵像が二幅掛けてござります。そのうち一体は、

ほとけの顔ではなくて、ただもう光りの輝くなかの「後光(頭光)」のようではっきりしたお姿はお見えではございません。ただもう光りばかりでございました。

もう一体の仏さまの絵は、はっきりとしめた仮のお顔でおいでになりますので、私は、「これは何というほとけなのでしょうか」と尋ねますと、どなたとも分かりませんが、「あの、光りばかりでおいでになりますのは、あれこそ法然上人ですよ。つまり勢至菩薩までいらっしゃる方なのです」と教えて下さいました。

「さて、またもう一体の絵は」と問いますと、「あれは、観音菩薩様なのです。あれこそ善信(親鸞の名前)の御房です」と申されるのを聞いて、なんとも衝撃を受けうち驚いたのです。これがなんと夢であつたと気づいたことあります。

しかしまあ、そのようなことは、人にいってはならないと聞いていますし、この私がそんなことを話したところで、どちらもほんとにそうだとは思いもしないでしようから、金輪際人には話さず、ただ法然上人のことだけを、夫の親鸞さんに申し上げたところ、「うん、夢にはいろいろな種類があるが、これぞ(妄想)ゆめ)に違いない。法然様を、いろんなところで、勢至菩薩の生まれ変わり(化身)だと、夢にも見たということがたくさんあることだし、そもそも勢至菩薩は智慧の極致で、だから智慧の光と、光明によってあらわされるのだ」と親鸞さんはおっしゃいました。



そのとき私は、殿(親鸞さま)は、だったら観音さまということは口には出しませんでしたが、心の中では、その後ずっと、世間普通のお方とは思いませんでした。あなた(乗鸞の若尾)も、どうぞ、そのよ

うに思って下さい。

ですから、ご臨終がたといふのとありますのも、私自身、夫は観音さまの化身と信じ疑いませんので、私とあなた同じことです。の方のご臨終にお遇いなさいこと、親子の契りとは申せ、よくよくのご縁と、深くお歓びなさいますなら、本当に嬉しく思います。

法然さまを勢至菩薩の化身と信じて、ただ法然さまの教えに従い通した親鸞。その親鸞を、生涯、わたしを導いてくれる観音菩薩と心の中で拝みながら過ごした恵信尼さま。

師弟にしろ夫婦にしろ、互いに拝みあい、その縁を貴びあい歓び会いたいものです。

法然さまを勢至菩薩の化身と信じて、ただ法然さまの教えに従い通した親鸞。その親鸞を、生涯、わたしを導いてくれる観音菩薩と心の中で拝みながら過ごした恵信尼さま。

師弟にしろ夫婦にしろ、互いに拝みあい、その縁を貴びあい歓び会いたいものです。

黙つていて先生と慕われる人が先生になつたつもりで振る舞うと反対をくう本当の先生。

七月のこよみ



『永代経』ご案内

九日	午前中 仏婦総合会	三日(木) 朗読ボランティアあすなろ
九日(火)	午後一時半 永代経	五日(土) おみがき清掃奉仕
九日(水)		六日(日) 組組合組会
七日(月)		七日(月) 宮嶋一子さま忌明法事
八日(火)		八日(火) 水代経
九日(水)		九日(水) 水代経
十一日(金)		十一日(金) 佛婦総合会
十二日(土)		十二日(土) 竜大同窓会
十三日(日)		十三日(日) 沢田美美子さま初盆
十九日(土)	基推会議	二十日(日) 仲田豊さま三回忌
二十日(日)		二十九日(火) 教区基幹運動研修会
二十九日(火)		三十一日(木) あすなろ(編集)
三十日(木)	検討	連研

六月二十三日 成田武夫さま	葬儀
六月二十三日 加古川	
七十四歳	
七十四歳	
七十四歳	

出石組 念仏奉仕団に

参加して

大石 正代



本願寺では、平成二十年度の念仏奉仕団の開催日が、四月三日に始まり翌年三月二十七日まで年間六十六回の計画が組まれ約二万余人の奉仕が行われて、以来これがもう五〇年も続いています。

出石組では今年も第四十二回目の念仏奉仕団が計画され、わたしもお参りさせていただきました。

五月二二・三日、一泊二日で出石組六十八名（内、勝林寺から六名）がバス二台での参拝ご奉仕でした。この出石組を含め全国各地より三百余人（十一団体）が聞法会館に集合、開会式、清掃奉仕、抹茶接待、書院・飛雲閣拝観、夕食後の常例布教の法話（一時間）と、第一日の日程を終了。

第二日。ご門主さまとの記念撮影、ご面接。そのときのお言葉。『念仏奉仕団の方々のご奉仕と、晨朝（じよじょう）法要でのお正信偈の唱和（唱和を唱える）は《本願寺の宝》であります』とお話下さいました。

清掃奉仕で腰を曲げて頑張っておられるおじいさんのお姿に出逢い、つい、私の家の仏間にある奉仕団のタスキをかけた数十年前の祖父の写真を思い出しました。（祖父は人一ただきありがとうございました）

この奉仕団のご縁で出石組のご門徒の皆様と親しくしていただき、また全国各地の皆様ともお話ができ、お念仏のご縁を結ばせていただきありがとうございました。

閉会式では、十回、十五回、二十回、二十五回ご奉仕された方の表彰が行われました。

勝林寺も多くの先人からひきつがれてきたこの念仏奉仕のここる。今年は斎藤保さん・昌子さんお二人が二十回の表彰を受けられました。本当におめでとうございます。表彰を受けられた十数名のなかに遠い遠い鹿児島の方が十回の表彰を受けられたのには、大変感動致しました。遠い先輩から、そして後代へと伝え継がれるであろうこの念仏奉仕のところは、わたくしたち勝林寺の誇りでもあります。

がなければ、十回・二十回とお参りはできないと感じました。

帰りは、大谷本廟参拝、市内観光。「元気で来年もおまいりを」の約束を交わしながら二日間共に過ごした皆様と別れを告げ、念仏のご縁におあいさせていただいた歓びを噛みしめながら家路につきました。



山々云いの場所

どんな人とも睦みあい出来る場所つて、なかなかそう簡単には見つけられないものです。



知的障害の人たちが共同で作業をしている施設の先生のお言葉です。

「ね、だれも、心・体のどこかに障害をもつて生きています。目・耳・鼻・口・頭の中・心の中・何処にも一つも障害を持たない人っていますか。人は例外なくみんな何らかの障害をもつて懸命に生きているのです。『目くそ鼻糞を笑う』のは悲しい。「同病あい哀れむ」、互いに慰めあい暖めあい手をとりあい励ましあう兄弟・仲間なんだから!、とおっしゃっていました。人間共通の「現実」の場面での出会いをこの先生はおっしゃっていました。

三番目は「おかあちゃん」。貧しくておやつもお菓子も、めったに食わしてもらわなかつたけど、七人いた兄弟、めなめに違つた道に別れて行つたが、どんなに暮らしさ別々に別れても、益正月にはみんな古里の臭い汚いおかあちゃんの家に帰つてきて、何はなくてもあるおふくろの味に浸つたものだ。与えられ恵まされた持所での出会い。

「ハイ、お手手を出して。ホレこんなにおいしい同じお菓子を上げるから、仲良くするんですよ」。同じお菓子、手のひらに載せてもらつたんだけれど、隣の花子ちゃんのと、やっぱり見比べちゃつてよ。やっぱり見比べて、競争が起こつてときにはハネコやいじめもあつたような気がします。

次は、ある学習塾を経営なさっている先生は、このように生徒さんに教えていました。人間は誰でもみんな上へ向かつて伸びようとする能力・意欲は先天的に持つていて。平等に能力意欲はあるのだけれど、その能力意欲を育てる環境や教育方法が間違うと、能力が発揮できる人、そうでなくて途中でつぶれてしまう人。いろいろな格差が出来てくる。この塾は全国最高の教育技術で有名校。国立大学への合格率を誇っています。いまの皆さんこの学校での成績がどうであれ、そんなことは気にしないで、この塾の教育指導に真面目についてくるなら誰でも一様に、国立大学間違いなし!

免強・学習、教育権の「理想」を掲げます。

その場の対策、場当たり的な治療は、よい結果を生まない。治療は、よい結果を生まない。

一人の時間は気楽で自由自在だが、一方ですると自堕落になる。ひとりの時間も自分で嬉しくなるようなさやかな演出を心がけりフレッシュ一たいものだ。

その場の対策、場当たり的な治療は、よい結果を生まない。

治療は、よい結果を生まない。

仕事に閉じこもり、意見も言わず、はすかいに冷たい目を仲間に向ける嫌な奴。ダンテの『懲罰の群れ』。

永年勤続で表彰されました。